

玉川大学文学部英語教育学科における英語教員養成の現状と課題

The Current Situation and Issues of Prospective English Teacher Training at Department of English Language Education, College of Humanities, Tamagawa University

森本 俊、工藤 洋路、米田佐紀子、村越 亮治
Shun Morimoto, Yoji Kudo, Sakiko Yoneda, Ryoji Murakoshi

1. はじめに

玉川大学文学部英語教育学科は、前身の文学部比較文化学科の改組に伴い、2015（平成27）年に開設された。学科は「英語教員養成コース」と「ELFコミュニケーションコース」の2つのコースから成り、前者では中学・高等学校の英語科教員の養成を柱とした教育活動を展開している¹⁾。4年間のカリキュラムには9ヵ月間の海外留学プログラムが必修として組み込まれており、「国際共通語としての英語」を駆使して国際社会で活躍できる人材の育成を行っている。また、「英語教員養成コース」在籍者は、「ダブル免許プログラム」を受講することにより小学校教諭二種免許状（全科）を取得することもできる。

本稿では、2022年度に文学部英語教育学科4年に在籍する教職課程受講生（2019年度入学生）を対象としたこれまでの実践を取り上げ、「教育実習（事前指導）」や「英語科指導法Ⅰ～Ⅲ」を通した大学での学修内容の整理及び教育実習の振り返りアンケートの分析²⁾を通して、本学科における教員養成の現状と課題を明らかにすることを目的とする。なお、本調査を実施した2022年度4年生は学科の第5期生であり、今年度は中学校の新学習指導要領が実施されて2年目、高等学校の新学習指導要領が実施された初年度にあたる³⁾。

2. 教育実習関連科目の概要

本節では、2022年度4年生がこれまで大学で学修してきた内容を授業科目ごとに概観する。表1の通り、本学科では、第3セメスター⁴⁾に「英語科指導法Ⅰ」（2単位）、留学後の第6セメスターに「教育実習（事前指導）」（0単位）及び「英語科指導法Ⅱ」（4単位）、第7セメスターに「英語科指導法Ⅲ」（2単位）及び「教育実習」（5単位）を履修することとなっている。この履修パターンは、カリキュラム改訂によって当該学年から実施となった⁵⁾。なお、本稿で取り上げる学生は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、学科の留学プログラムが全面中止となり、代替として玉川大学または留学先大学が提供するオンライン授業を第4～第5セメスターに受講した。そのため、現地での留学を通した学び（実践的な英語力の向上や異文化理解の体験、一部の留学先で実施される現地の学校でのインターンシップ）ができなかった。

表1 教育実習関連科目の履修

第3セメスター	「英語科指導法Ⅰ」（2単位）
第4セメスター	留学（2022年度4年生は、玉川大学または留学先大学が提供するオンライン授業）
第5セメスター	
第6セメスター	「教育実習（事前指導）」（0単位）、「英語科指導法Ⅱ」（4単位）
第7セメスター	「教育実習」（5単位）、「英語科指導法Ⅲ」（2単位）

2.1 「英語科指導法Ⅰ」(2020年度春セメスター開講：2年次)

本授業は2単位の科目であり、中学校および高等学校における英語の授業実践に必要な基礎的な知識とスキルを学修する入門的な位置づけである。この授業は以下のシラバスで、3名の学科教員が担当した。なお、この授業は、新型コロナウイルス感染症が拡大した最初の年度の春セメスター開講であったことから、全面オンラインで実施された。

第1回	中学校・高等学校における英語教育
第2回	中学校・高等学校の学習指導要領
第3回	中学校の検定教科書
第4回	高等学校の検定教科書
第5回	小学校の外国語活動・外国語科
第6回	小学校と中学校の連携
第7回	3つの資質・能力および領域別の学習到達目標
第8回	外国語の習得のプロセス
第9回	外国語の習得のプロセスを踏まえた授業指導
第10回	年間指導計画・単元計画・各授業時間の指導計画
第11回	模擬授業（中学校1年生対象）
第12回	模擬授業（中学校2年生対象）
第13回	模擬授業（中学校3年生対象）
第14回	模擬授業（高校1～2年生対象）
第15回	模擬授業（高校2～3年生対象）

本授業は英語指導の入門的な位置づけであるため、学習指導要領や検定教科書を理解することが最初の段階として求められている。また、2020年度から教科化された小学校での外国語（英語）に関する知識は、中学および高等学校の英語の教員として必須のものである。これらの基礎的な理解をした上で、後半では模擬授業を初めて行い、授業実践者としての自身の課題を具体化することがこの授業の目的である。

2.2 「英語科指導法Ⅱ」(2021年度秋セメスター開講：3年次)

本授業は4単位の授業であり、30回の授業を理論編（15回）と実践編（15回）に分けて、週1回ずつ設定されている。学年を2クラスに分けて展開している。

2.2.1 理論編

理論編は、以下のシラバスで、学科教員1名が担当した。この授業では、これまでの外国語教育において実践されてきたさまざまな教授法を取り上げ、その背後にある理論を理解するとともに、マイクロティーチングを通して実践に応用する技能を身に付けることを目標としている。教科書としてLarsen-Freeman, D., & Anderson, M. (2011). *Techniques & Principles in Language Teaching* (3rd edition.), Oxford: Oxford University Press.を使用している。留学後の第6セメスターは教職関連の授業が全体の大部分を占め、英語に触れる機会が減少するという現状を鑑み、英語の文献を使用することとした。

第1回	教授法とは何か
第2回	Grammar Translation Method（理論）
第3回	Grammar Translation Method（応用）

第4回	The Direct Method（理論）
第5回	The Direct Method（応用）
第6回	The Audio-Lingual Method（理論）
第7回	The Audio-Lingual Method（応用）
第8回	Communicative Language Teaching（理論）
第9回	Communicative Language Teaching（応用）
第10回	Content-based Instruction（理論）
第11回	Content-based Instruction（応用）
第12回	Task-based Language Teaching（理論）
第13回	Task-based Language Teaching（応用前半）
第14回	Task-based Language Teaching（応用後半）
第15回	学修内容の総括

授業では、事前課題として教科書の該当章の概要レポートを作成することを求める。理論回では教員による解説を行い、ディスカッションを行う。授業の最後に課題が課され、4人～5人のグループで準備を行う。応用回では、各グループがマイクロティーチングを行い、フィードバックを受ける。具体的な活動としては、「コミュニケーション英語Ⅰの物語文の1シーンを演じ、感情を込めて表現する」や「中学生の教科書本文を題材としてThe Audio-Lingual Methodで学修した各種口頭ドリルを実践する」、「与えられた言語材料を使った言語活動をデザインし、実践する」といったものが挙げられる。

2.2.2 実践編

実践編は、以下のシラバスで、学科の教員2名で担当した。2年次春 semester に「英語科指導法Ⅰ」を履修しているが、留学のためこの授業は3年次秋 semester に設定されていることから、1年期間が空いた状況での履修になっている。この授業では「英語科指導法Ⅰ」で学修した内容を振り返りながら、次の semester での教育実習に向けて、より実践的なスキルを育成する授業としての位置づけである。

第1回	語彙・表現の導入の在り方
第2回	文法の導入の在り方
第3回	内容・題材の導入の在り方
第4回	模擬授業（語彙・表現の導入）
第5回	模擬授業（文法の導入）
第6回	模擬授業（内容・題材の導入）
第7回	聞くこと・読むことの指導および評価
第8回	話すこと（やり取り・発表）の指導および評価
第9回	書くことの指導および評価
第10回	技能統合型の言語活動
第11回	音声・文字の指導
第12回	英語でのインタラクション
第13回	模擬授業（中学1年生対象）
第14回	模擬授業（中学2、3年生対象）
第15回	模擬授業（高校生対象）

本授業で扱う内容のほとんどは学習指導要領に記載されている事項となっているが、第7回の「聞くこと・読むことの指導」において、伝統的に日本の英語教育で用いられてきた「文法訳読式を利用した読むことの指導」を扱っている。この方法は学習指導要領では言及されておらず、明示されてはいないが、避けるべき指導方法であることが示唆されている。一方で、この手法は特に高等学校では現在でも幅広く用いられている手法であり、教育実習生がその手法で授業を行うことを求められることも多いことから、本授業では、その功罪を確認した上で、この方法を実践するためのトレーニングを行った。

2.3 「教育実習（事前指導）」（2021年度秋セメスター開講：3年次）

本授業は教育実習5単位の一部であり、教育実習に行く直前の3年次秋セメスターに行われた。実習にあたって、事前に身に付けるべき教員としての心構えと実践力を総合的に身に付けることが求められている。この授業では、中学校の管理職や教育委員会経験者2名を含め、学科教員3名が指導に当たった。シラバスは以下の通りである。

第1回	教育実習に向けて
第2回	学習指導要領・授業作りのポイント
第3回	授業計画と指導案
第4回	小中連携を踏まえた英語の授業実践
第5回	中学校の授業実践
第6回	高校の授業実践
第7回	模擬授業の準備
第8回	現職教員の英語の授業視聴
第9～13回	中高の授業実践（模擬授業）①～⑤ グループ3つに分かれた模擬授業と相互評価
第14回	教員としての在り方（服務、マナー、地域・家庭との連携等）
第15回	総括：教育実習を行うにあたって

第14回以外は、英語の授業実践に関わる内容を扱っていることから、本授業は、教育実習で英語の授業を実践するために必要な知識と技術を身につけることを主眼とした授業であると言える。また、第8回の「現職教員の英語の授業視聴」については、民間の英語教育の学会（ELEC 同友会英語教育学会）が主催する「ビデオによる授業研究」に学生を参加させ、実際の授業の1コマ（50分）を見学する機会を設定している。このプログラムは、2021年度はコロナ禍のためオンラインでの実施であったが、学生は無料で参加ができ、また、学生向けに詳細な解説も提供されることから、現状の教育現場の実態を知る上でも貴重な機会であると言える。

2.4 「英語科指導法Ⅲ」（2022年度春セメスター開講：4年次）

本授業は、教育実習が行われる4年次の春セメスターに開講されていることから、以下のシラバスの通り、第8回までは教育実習の前（4月週2回で実施）に行われ、第9回以降は実習後（7月に週2回で実施）に行われた。学科の教員2名が担当した。

第1回	学習到達目標に基づく授業の組立て
第2回	4技能5領域の指導
第3回	観点別評価
第4回	教育実習を見据えた学習指導案の作成

- 第5回 模擬授業（中学校における文法の導入）
 第6回 模擬授業（中学校における内容の導入）
 第7回 模擬授業（高等学校における文法の導入）
 第8回 模擬授業（高等学校における内容の導入）

《教育実習期間》

- 第9回 言語能力（書くこと）の測定と評価
 第10回 言語能力（話すこと）の測定と評価
 第11回 言語能力（聞くこと・読むこと）の測定と評価
 第12回 定期考査の問題の作成および実施体験
 第13回 パフォーマンステストの作成および実施体験
 第14回 多様な授業形態
 第15回 これからの英語教育の在り方

教育実習前までの8回では、実習で授業を実践するために必要な知識とスキルを再確認し、実習の直前は模擬授業を通して、実習の予行練習を行う位置づけの授業であった。

2.5 授業で実施した模擬授業

上記の各授業の中で模擬授業を行っているが、表2の通り、学修が進むにつれて模擬授業の時間を徐々に長くし、また、授業の内容も具体的に方法等を指定された段階から、実習に向けて学生自らがその内容を考えて実践する方法へと変えていった。履修者数が40名を超えていたため、一人50分の授業を行う機会が取れなかったのが課題ではあるが、英語の授業の柱である「文法」「本文」「言語活動」の全てを扱うことができた。

表2 各授業で実施した模擬授業の詳細

2年次 春セメ スター	英語科 指導法Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ● 任意の文法事項について、初めてそれを学習する生徒を想定して、1) 英語で口頭で導入（Oral Introduction）をし、2) その理解を確認し、3) それを解説する、という3つの段階（12～15分程度）を行う。 ● 一方通行の導入ではなく、生徒に質問をしたり、Repeat after me.を入れたりなど、インタラクティブな授業を目指す。 ● その文法事項を初めて学習する生徒にとって最適な場面や状況を、自分で考えて設定する。
3年次 秋セメ スター	英語科 指導法Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ● 「話すこと（やり取り）」の言語活動（15分程度）を行う。 ● 「話すこと（やり取り）」について、学習指導要領で示されたものから1つ選び、自分で考案したものを実施する（教科書等の活動は用いない）。 ● 教師は指示を出すだけではなく、モデルを示したり、事前の練習をしたり、中間評価をしたり、フィードバックをしたり、細かいステップを踏む展開を実施するなど、英語の教師だからこそできる支援や指導を行う。
	教育実習 (事前指導)	<ul style="list-style-type: none"> ● 導入部分から始まる続きの18分の授業を行う（文法導入か本文導入のいずれか）。
4年次 春セメ スター	英語科 指導法Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ● 教育実習の予行練習として、英語でインタラクティブに行う箇所を中心に授業を行う（内容や教科書等は自分で選ぶ）。 ● 授業は続きの22分間とする。

3. アンケート調査

3.1 調査概要

前節の「教育実習（事前指導）」及び「英語科指導法Ⅰ～Ⅲ」の学修を踏まえ、学生が教育実習で実際どのような取り組みを行い、どのような課題があるのかについて把握するため、教育実習後にアンケート調査を実施した。Google Forms上でアンケートを作成し、「英語科指導法Ⅲ」の授業時間内に回答を求めた。計40名のうち、調査へのデータ提供に同意を得られなかった1名を除いた39名（男：19名、女：20名）のデータを分析した。アンケートは計40問から成り、回答の所要時間は約20分であった。実習校の内訳は、中学校23校（59%）、高等学校14校（35.9%）、中高一貫校2校（5.1%）であり、公私の内訳は、公立が30校（76.9%）、私立が9校（23.1%）であった。

3.2 調査結果と考察

3.2.1 Q1～Q21の結果および考察

表3は、Q1～Q21の結果をまとめたものである。Q1（英語の授業を行うことは楽しかった）では、「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」と回答した学生が94.9%を占めた。授業の満足度（Q2、3）については、研究授業を除く授業で「全く当てはまらない」または「あまり当てはまらない」を選択した学生と「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」を選んだ学生が約3：7の割合であった。同様の傾向は研究授業にも見て取れた。大学で実施した模擬授業の量や回数（Q4）については、76.9%の学生が「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」を選択していたが、残りの23.1%の学生は「全く当てはまらない」または「あまり当てはまらない」と回答した。教育実習を実施する上での自身の英語力（Q5）については、「全く当てはまらない」または「あまり当てはまらない」を選択した学生が71.8%を占め、不十分であると認識した学生が多数を占めていることが示された。Q6とQ7ではどの程度自由に指導案を考えることができたかを問うたが、授業全般では79.5%、研究授業では84.6%の学生が「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」と回答しており、全体を通して自由度が高い学校が多かったことが示唆される。

Q8以降は、授業で行う具体的な活動に関する設問である。「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」を選択した学生が80%以上であった項目として「コミュニケーション活動」（Q8）、「机間指導」（Q14）、「多様な学習形態」（Q17）、「日々の授業のリフレクション」（Q20）が挙げられた。70%以上であった項目としては、「文法の指導」（Q9）や「語彙指導」（Q10）、「大学で学んだ指導手順や授業の展開の実践」（Q13）、「エラーへの対処」（Q15）、「ICTの活用」（Q16）、「文法導入」（Q18）、「50分間のタイム・マネジメント」（Q21）が挙げられた。Q11の「授業全般では、英文和訳の指導に時間を多く費やした」については、「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」を選択した学生が46.2%を占めており、半数に迫る学生が英文を和訳する活動に多くの時間を費やした傾向が見て取れる。英文を和訳する行為そのものには教育的な価値があるものの、コミュニケーションを主体とする英語授業が求められる現在の状況を鑑みると、やや多い値であったと考えられる。Q12の「音読」に関しては、64.1%の学生が「やや当てはまる」または「かなり当てはまる」を選択しており、積極的に音読活動を実施した一方、23.1%は「あまり当てはまらない」を選択しており、ばらつきが見られた。設問の中で注目すべきは、Q19の「本文導入」である。「全く当てはまらない」または「あまり当てはまらない」を選択した学生が30.8%と他の項目よりも高かった。その一因として、大学の授業における模擬授業では時間や学生数の関係上、文法導入に比重が置かれることが多かったことや、学生の導入に対するまとまったフィードバックの時間が十分に取れなかったことが考えられる。

表3 アンケート結果 (Q1～Q21)

項目	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	やや当てはまる	かなり当てはまる
Q1. 英語の授業を行うことは楽しかった。	0 (0.0%)	2 (5.1%)	14 (35.9%)	23 (59.0%)
Q2. 実習期間を通して、満足できる授業ができた。	0 (0.0%)	12 (30.8%)	19 (48.7%)	8 (20.5%)
Q3. 研究授業では、満足できる授業ができた。	4 (10.3%)	11 (28.2%)	16 (41.0%)	8 (20.5%)
Q4. 実習前までに行ってきた模擬授業（授業内・授業外の両方を含む）の量や回数は適切であった。	2 (5.1%)	7 (17.9%)	23 (59.0%)	7 (17.9%)
Q5. 教育実習で授業をする上で、自身の英語力は十分であった。	9 (23.1%)	19 (48.7%)	8 (20.5%)	3 (7.7%)
Q6. 【授業全般では】自由に指導案を考えることができた。	1 (2.6%)	7 (17.9%)	16 (41.0%)	15 (38.5%)
Q7. 【研究授業では】自由に指導案を考えることができた。	0 (0.0%)	6 (15.4%)	19 (48.7%)	14 (35.9%)
Q8. 授業全般では、コミュニケーション活動を適切に実施できた。	1 (2.6%)	6 (15.4%)	22 (56.4%)	10 (25.6%)
Q9. 授業全般では、文法の指導を適切に実施できた。	0 (0.0%)	8 (20.5%)	26 (66.7%)	5 (12.8%)
Q10. 授業全般では、語彙・表現の指導を適切に実施できた。	0 (0.0%)	8 (20.5%)	26 (66.7%)	5 (12.8%)
Q11. 授業全般では、英文和訳の指導に時間を多く費やした。	12 (30.8%)	18 (46.2%)	6 (15.4%)	12 (30.8%)
Q12. 授業全般では、音読を多く行った。	0 (0.0%)	9 (23.1%)	17 (43.6%)	8 (20.5%)
Q13. 大学の授業で学んだ「指導手順」や「授業の展開」を実習の授業で行った。	0 (0.0%)	9 (23.1%)	22 (56.4%)	8 (20.5%)
Q14. 授業全般では、机間指導を適切に実施できた。	0 (0.0%)	2 (5.1%)	19 (48.7%)	18 (46.2%)
Q15. 授業全般では、生徒の犯したエラーに適切に対処することができた。	1 (2.6%)	10 (25.6%)	22 (56.4%)	6 (15.4%)
Q16. 授業全般では、デジタル教科書等のICTを効果的に活用することができた。	3 (7.7%)	5 (12.8%)	14 (35.9%)	17 (43.6%)
Q17. 授業全般では、個人・ペア・グループ・クラス全体といった多様な学習形態を取り入れることができた。	0 (0.0%)	4 (10.3%)	14 (35.9%)	21 (53.8%)
Q18. 授業全般では、文法導入を適切に実施できた。	2 (5.1%)	9 (23.1%)	20 (51.3%)	8 (20.5%)
Q19. 授業全般では、本文導入を適切に実施できた。	4 (10.3%)	8 (20.5%)	21 (53.8%)	6 (15.4%)
Q20. 日々の授業のリフレクションを行い、次の授業への改善を図ることができた。	0 (0.0%)	4 (10.3%)	21 (53.8%)	14 (35.9%)
Q21. 授業全般では、50分間のタイム・マネジメントを適切に行うことができた。	1 (2.6%)	8 (20.5%)	21 (53.8%)	9 (23.1%)

3.2.2 因子分析による英語授業のタイプ抽出

次に、Q1～Q21の結果に見られる変数の背後にあると想定される要因を明らかにするために、因子分析を行った。分析にあたっては統計分析のフリープログラムのHADを用いた。因子負荷構造は表4に示すとおりである。

表4 因子分析（最小二乗法 プロマックス回転）の結果

項目	第1 因子	第2 因子	第3 因子	第4 因子	共通性
[Q6] 【授業全般では】自由に指導案を考えることができた。	.856	-.241	.203	-.051	.808
[Q2] 実習期間を通して、満足できる授業ができた。	.832	.198	-.312	.093	.760
[Q7] 【研究授業では】自由に指導案を考えることができた。	.691	-.170	.399	-.001	.742
[Q3] 研究授業では、満足できる授業ができた。	.597	-.063	-.451	-.189	.416
[Q1] 英語の授業を行うことは楽しかった。	.411	-.010	-.212	-.240	.223
[Q21] 授業全般では、50分間のタイム・マネジメントを適切に行うことができた。	.384	.183	.168	.197	.298
[Q15] 授業全般では、生徒の犯したエラーに適切に対処することができた。	-.133	.654	.359	-.148	.604
[Q9] 授業全般では、文法の指導を適切に実施できた。	-.075	.573	-.071	.102	.305
[Q20] 日々の授業のリフレクションを行い、次の授業への改善を図ることができた。	.072	.551	-.299	.013	.374
[Q10] 授業全般では、語彙・表現の指導を適切に実施できた。	-.190	.531	-.049	-.150	.292
[Q19] 授業全般では、本文導入を適切に実施できた。	.322	.495	.202	.242	.540
[Q14] 授業全般では、机間指導を適切に実施できた。	.077	.480	.020	-.112	.293
[Q16] 授業全般では、デジタル教科書等のICTを効果的に活用することができた。	.193	.409	.037	-.269	.380
[Q18] 授業全般では、文法導入を適切に実施できた。	-.073	-.011	.739	.187	.510
[Q13] 大学の授業で学んだ「指導手順」や「授業の展開」を実習の授業で行った。	.034	.044	.546	.356	.372
[Q17] 授業全般では、個人・ペア・グループ・クラス全体といった多様な学習形態を取り入れることができた。	-.101	-.006	.488	-.031	.224
[Q11] 授業全般では、英文和訳の指導に時間を多く費やした。	.033	.344	-.405	.398	.426
[Q8] 授業全般では、コミュニケーション活動を適切に実施できた。	.221	.160	.396	-.292	.470
[Q12] 授業全般では、音読を多く行った。	-.108	-.008	.192	.774	.606
[Q5] 教育実習で授業をする上で、自身の英語力は十分であった。	-.014	.464	.104	-.574	.651
[Q4] 実習前までに行ってきた模擬授業（授業内・授業外の両方を含む）の量や回数は適切であった。	-.115	.159	-.147	-.251	.108
因子寄与	3.307	2.925	2.511	1.900	10.643
因子寄与率（%）	15.7	13.9	12.0	9.0	50.7

これらの結果から、4つの因子について負荷量の高い項目群の内容を解釈し考察することにより、以下のよう各因子を名付けた。

第1因子：「自由な指導による満足度向上」タイプ

第2因子：「フィードバック・リフレクション重視」タイプ

第3因子：「大学での学修の活用」タイプ

第4因子：「低い英語力による音読重視」タイプ

第1因子は、教育実習で自由に指導案を考えることができれば、授業の満足度が高く楽しい授業ができた」と認識する傾向にあるということを示している。しかしながら、この因子には、授業時間のマネジメントに関する項目以外に、授業の内容や質に関わる項目がないことから、自由に考えたことによる高い満足度であって、必ずしも授業が成功しているわけではないとも言える。実習中は、指導案を作る際に、指導教諭からあ

る程度の具体的な指示があった方が、単に満足して終わりという授業にはならないと言えるだろう。よって、「教育実習（事前指導）」及び「英語科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」において、指導案を作成する際に指導教諭にしてもらい、具体的な指示を仰ぐよう指導していくことが求められる。

第2因子は、生徒へのフィードバックができるということは、「問題点を把握し、その解決方法を提示できる」ということであるため、自身の授業も同様に振り返ることができるということを示唆している。また、この因子には、文法や語彙、本文など英語の授業で扱うべき内容についての適切な指導に関する項目が見られることから、指導事項を適切に指導できるようになるためには、生徒及び自身の問題点や課題を把握し、解決策を考案できるスキルが必要であることが示唆される。

第3因子は大学での学修に関する項目が多く見られる。文法導入やペアワークを充実させることなどは、「教育実習（事前指導）」や「英語科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業で繰り返し学修してきた内容である。繰り返し学修した項目が1つの因子として表出されたことは、大学での学修に一貫性があることを示している。今後の「教育実習（事前指導）」や「英語科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、これまで重視してきた文法指導などと連関させて、この因子に寄与していない他の項目（例えば、第2因子の生徒のエラーへの対処）を扱っていくことで、大学での学修がより体系化していくことが期待される。

第4因子は、自身の英語力が不十分だと認識していると、音読活動が増えることが示唆されている。音読活動は、既成の本文をRepeat after me.などの指示だけで進めることができるため、一見すると、実施するのが簡単だと思われる活動である。言語活動など自由度が高い活動を実施するためには、生徒からの想定できない質問などに対応する英語力などのスキルが必要なため、音読を多くすることで、言語活動を行う時間が少なくなり、自身の英語力の低さが問題にならない指導方法を結果として用いていると考えることができる。もちろん、音読活動は簡単な活動ではなく、教師の英語力が高い方が発音のモデルを見せるなど指導を効果的に行うことができるため、本来は、英語力が低い教師でも実施可能な活動だと言えるものではない。

このように教育実習の英語の授業に関して4つの因子が見られたが、どの因子も今後の英語教職課程の学生の指導にとって、非常に重要な示唆を与えている。これらの4つのパターンを考慮しながら、「教育実習（事前指導）」や「英語科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業を実践していくことが望まれる。

3.2.3 Q22～Q29の結果および考察

Q22～29では、教育実習における授業での英語の使用、説明・解説、言語活動の割合をそれぞれ指導教諭と学生自身に分けて尋ねた。表5はその結果をまとめたものである。指導教諭の英語使用の割合については、60%～80%が最も多い28.2%であり、20%～40%と40%～60%が同数の23.1%であった。一方、学生については40%～60%が最多の28.2%であり、40%～60%が33.1%であった。注目すべきは、80%～100%と回答した学生が12.8%であり、指導教諭の7.7%と比較して大きな割合を占めていた。全体的には学生は指導教諭と比較してより多く授業時に英語を使用することを試みたことが示唆された。この傾向は、Q25で一般論として理想的な英語使用の割合を尋ねた結果、66.7%の学生が60%以上と回答していることから支持される。さらに注目すべき点として、0%～20%という回答も指導教諭が15.4%、学生が12.8%となっていることが挙げられ、日本語の使用を主とする授業も一定数行われていることが示された。

授業における説明や解説の割合については、指導教諭で最も多かったのが20%～40%と40%～60%の35.9%であった。また、60%以上が23.1%であった。一方、学生の約半数（48.7%）が20%～40%と回答し、60%以上と回答したのは10.3%に留まった。大学の授業では、教師による説明や解説は極力簡潔に分かりやすくし、生徒が英語を使う時間を多くするよう指導しており、学生の多くがその方針に沿った授業を展開したと推察される。

言語活動の割合については、指導教諭と学生ともに40%～60%が最も多く、それぞれ35.9%と43.6%であった。また、60%～80%については指導教諭が25.6%、学生が20.5%であり、指導教諭の方がより多くの時間

を言語活動に割く傾向にあることが示唆された。程度の差はあるものの、全体を通して学生は言語活動を自身の授業で実践していたことが見て取れる。

表5 アンケート結果 (Q22～Q29)

項目	0%～20%	20%～40%	40%～60%	60%～80%	80%～100%	分らない
Q22.【指導教諭の授業について】教師の英語使用の割合はどのくらいでしたか。	7 (17.9%)	9 (23.1%)	9 (23.1%)	11 (28.2%)	3 (7.7%)	0 (0.0%)
Q23.【あなたの授業について】教師の英語使用の割合はどのくらいでしたか。	6 (15.4%)	4 (10.3%)	13 (33.1%)	11 (28.2%)	5 (12.8%)	
Q24.【あなたの授業について】研究授業では、教師の英語使用の割合はどのくらいでしたか。	5 (12.8%)	5 (12.8%)	10 (25.6%)	12 (30.8%)	7 (17.9%)	
Q25.【一般論として】英語の授業での、教師の英語使用の理想的な割合はどのくらいだと思いますか。	0 (0.0%)	2 (5.1%)	11 (28.2%)	14 (35.9%)	12 (30.8%)	
Q26.【指導教諭の授業について】教師が説明や解説をしている時間の割合はどのくらいでしたか。	2 (5.1%)	14 (35.9%)	14 (35.9%)	8 (20.5%)	1 (2.6%)	0 (0.0%)
Q27.【あなたの授業について】教師が説明や解説をしている時間の割合はどのくらいでしたか。	0 (0.0%)	19 (48.7%)	16 (41.0%)	4 (10.3%)	0 (0.0%)	
Q28.【指導教諭の授業について】生徒が言語活動を行っている時間の割合はどのくらいでしたか。	3 (7.7%)	11 (28.2%)	14 (35.9%)	10 (25.6%)	0 (0.0%)	1 (2.6%)
Q29.【あなたの授業について】生徒が言語活動を行っている時間の割合はどのくらいでしたか。	2 (5.1%)	12 (30.8%)	17 (43.6%)	8 (20.5%)	0 (0.0%)	

3.2.4 Q30～Q40の結果および考察

Q30では、教育実習で授業を担当した主たる学年を尋ねた（複数回答可）。中学校で最も多かったのが2年の13名（33.3%）であり、1年生が12名（30.8%）、3年生が3名（7.7%）であり、大多数が1年または2年に配当されていた。高等学校については、2年生が11名（28.2%）で最多となり、1年と3年は同数の3名ずつ（7.7%）であった。どの学年の授業を担当するかは英語科の指導教諭の所属学年に拠るところが大きいが、全体的な傾向として中学であれば1,2年を、高等学校であれば2年生を想定した模擬授業等の実践を行う機会を提供することが求められることが示唆された。

Q33では、教育実習でALTとのチームティーチングを行った英語の授業の有無を尋ねた。「はい」と回答したのが13人（33.3%）、「いいえ」が26人（66.7%）であり、約3割の学生がチームティーチングを経験したことが明らかになった。教育実習の事後指導では、「ALTにどのような役割を振ったら良いか分からなかった」や「発音のモデルとしてしか活用することができなかった」という声が寄せられたが、大学の模擬授業ではチームティーチングを行うことは現実的に困難であり、授業においてチームティーチングで留意すべき点を解説するに留まるのが現状である。現場での経験を通して習熟していくしかないというのが実情であるが、大学の授業でチームティーチングの授業動画を視聴して分析を行うといった取り組みを今後検討していくことが必要である。

Q35では、実習校の指導担当の先生から授業中の教師の英語使用について指示があったかどうかを尋ねた。「あった」と回答した学生が25人（64.1%）、「なかった」と回答した学生が14人（35.9%）であり、6割以上の学生が指示を受けていた。「あった」と回答した者に対して具体的にどのような指示があったのかを記

述するよう求めた結果、最も多かったのが「可能な限り英語・クラスルームイングリッシュを使うこと」であった。具体的には、「なるべくオールイングリッシュで」（以下、原文ママ）。や「生徒が理解できる、簡単な指示はなるべく英語にする」、「難関クラスに対しては、なるべく英語で指示を出してほしい」といったものが挙げられた。

以上に加え、「基本的に教師の言語割合は、英語：日本語を7：3を理想としているので、それを心がけてほしい」や「理解能力が高い可能性があるから全体にわかりやすくするように日本語での指示を多めすること（できれば英語の使用割合を25%～50%の間で行うこと）」、「英語を多く使いすぎると難しくなりすぎてしまうので、使う英語は絞るように指示を受けた」といった「英語使用の割合」に関する回答も多く見られた。さらに、授業における説明や指示を行う際の言語使用に関する回答も複数挙げられた。具体的には、「英語を使用する際は丁寧に行う。英語で説明した後に補足説明を日本語で入れると理解が早くなる」や「英語での指示を理解できていたり、何をやるかわかっている中学1年生は既に文法を先取りしているか、英語だけの指示だと伝わらない生徒もいるので、英語で指示を出した後に日本語で伝える」といった、英語の指示の後に日本語で補足するという内容に加え、「指示するときは英語でも構わないが説明まで英語にすると難しいし生徒も聞く気無くなるから使いわけた方がいい」や「言語活動の説明のときに、英語で説明したことを日本語で再度説明していたため、その日本語はいれなくてよいという指示でした」といった回答が見られた。英語での説明を日本語で言い直すことに対して意見が分かれていたが、英語のみでは重要な情報が伝わらないため、日本語で補足することを推奨する指示が多く見られた。

最後に、「英語の話し方」に関する指示が複数挙げられた。具体的には「発話速度」（例：「ゆっくりなどにはせず、日常会話程度で行うように指示があった」、「アクセントの置き方、簡単で簡潔にすること、ゆっくりと話すこと、繰り返し過ぎないこと」）や「音量」（例：「英語は声が通りづらいから大きな声で鮮明な発音で話す」、「簡潔で分かりやすい表現の使用」（例：「短いフレーズでキーワードを言う」、「クラスルームイングリッシュをできるだけ多く、様々な言い換えをして使う」）、「正しい発音」（例：「生徒が誤った発音を覚えないように発音に気を配る」）といった内容であった。

以上を総合すると、全体としては教師が積極的に英語を使用することをベースとしつつ、生徒にとって理解しやすい発話を心掛けること、そして日本語を使用する適切なタイミングを見極める必要があるという傾向が見て取れる。

Q36では、実習中に使用したICTを全て選択するよう求めた。その結果、最も多かったのがPowerPoint教材であり、79.8%の学生が使用した。タブレット端末については、教師用が約半数の48.7%、生徒用が43.6%であった。デジタル教科書については、46.2%の学生が使用したと回答した。また、YouTube等のWeb上の動画も41%の学生が使用した。以上の結果を踏まえると、GIGAスクール構想の推進に伴う学校現場のICT化は着実に進んでおり、特にタブレット端末やデジタル教科書の授業における活用について実習前に経験を積ませることが重要となることが示唆された。

Q37～Q40については、それぞれ2名以上の学生が言及したコメントを選び、分析と考察を行った。「実習校の指導担当の先生から指示されたり、助言されたりしたことで、役に立ったこと」（Q37）については、①「教材提示に関する指示・助言」、②「タイム・マネジメントに関する指導・助言」、③「効果的な指示の出し方や身のこなし」、④「目的・目標の明確化」、の4つのカテゴリに関するコメントが目立った。

具体的に見てみると、①では、「生徒がストレスなく見えるスライドの文字サイズ」「板書時の文字等の色分け・筆圧」「板書時の体の向き」「板書した情報のうち、消してよいもの・残しておくものの区別」などが挙げられている。スライドの文字サイズについては、模擬授業時などに個別の助言は行ってきたが、教材提示の主流になってきているスライドの作り込み方をさらに体系的に指導すべきなのかもしれない。一方で、板書に関する助言を受けたという学生も多かったが、教材提示の手段としてスライドの使用が増えている中で、アナログでよりライブ感のある板書については、あまり意識されていなかったと想像できる。板書時の留意

点や使いどころ、授業におけるデジタルとアナログの効果的な融合について、教職課程でもより明示的にきめ細かく指導したい。

②については、「テンポよく進める」「活動・指導の時間配分を詳細に決めておく」「タイマーの使用により生徒に緊張感を持たせる」という助言が具体的に挙げられた。時間的な制約があり簡単ではないが、場面を切り取ったマイクロティーチングだけでなく、1時間を通した練習をさせることができれば、各活動・指導にかけべき時間をより実感できるだろう。

③の具体的なコメントとしては、「指示はゆっくりはっきりと出す」「特に英語での指示は短い文でくり返し話す」「生徒の集中や準備を確認してから指示を出す」「活動の始め・終わりを明確にする」「生徒の発話に対してリアクションやフィードバックを丁寧に行う」「一つひとつの説明や活動ごとに生徒の反応や理解度を確認する」などがあった。模擬授業などでも、英語による指示はやや早口で、口調も平坦になる学生が多かった。また、クラスメートを生徒に見立てた模擬授業では、中・高生の言動や反応に対処するようなより現実味のある練習ができないため、折に触れて上のような助言をくり返し行っていく必要があるだろう。

④では、「1回の授業ごとに、何を学んでほしいのかを目標として定める」「一つひとつの活動の目的・目標を生徒にわからせておくことが大切である」などが挙がっていたが、これについては、単元計画の立て方、単元のゴールタスクの設定、それにつながる言語材料の指導やスキルの積み上げ練習のあり方を、演習を交えて引き続き指導していくということに尽きるだろう。

一方、「実習校の指導担当の先生から指示されたり、助言されたりしたことで、違和感を覚えたり、自分の考えと異なると思ったりしたこと」(Q38)については、まず、多数の学生が言及していたこととして、「音読活動のタイミング」(意味理解の前に行うことへの疑問)があった。それぞれの授業の流れや音読活動自体のねらいによっては、タイミングが異なることも可能性としてはあるが、この点に疑問を抱くような分析意識があることは良いことである。「文法学習に言語活動が伴わない」「発話のモニターが困難であるという理由からペアワークは避ける」「教師の英語使用が少ない」ということに対する疑問については、教職科目で学んだり練習したりした内容とのギャップを、学生が感じたことにより生じたものと思われる。また、特に中学校で実習を行った複数の者からは、「Bingo 活動への依存度の高さ」(帯活動・家庭学習課題として)に対する疑問が挙げられていた。Bingo 活動は手軽に、また楽しめながら語彙学習に取り組ませることができることから、一時期かなり流行した活動であるが、授業のメインパートとのつながりが見えなかったり、使用場面や文脈がない状態で語彙が扱われたりする傾向があるため、長期的にはあまり効果が期待できないことがある。それを学生たちが感じていたとすれば、授業分析がある程度できていたことになるだろう。

『英語科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』及び『教育実習(事前指導)』で学んだことで、実習の中で役に立ったこと」(Q39)として、最も多くの学生から挙げられたのは、「模擬授業」であった。その中で練習した「英語で進める授業(クラスルームイングリッシュ含む)」「文法の導入のしかた」についても多くの言及があった。さらに、「授業の流れ・活動の順序」や「音読活動のバリエーション」も複数挙がっており、引き続き、マクロ的視点、ミクロ的視点の両方から授業を捉えた指導を行っていくことが有効であると思われる。

その一方で、「『英語科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』及び『教育実習(事前指導)』の授業でもっと学んでおきたかったこと」(Q40)として、まず「板書のしかた」を挙げた学生が多数いた。「指導教諭からの指示・助言」のところでも述べたが、ICTを活用した教材提示や指導・練習が広く行われている中にあっても、板書のスキルは欠かせない。現場の状況に応じた即戦力として、黒板とチョークによる効果的な板書のしかたについて、指導法の授業などで明示的に扱っていくことが示唆された。また、「模擬授業」に関して、多くの学生が役に立ったと回答しているものの、「フルサイズまたはそれに近い長さの模擬授業をやっておきたかった」というコメントもいくつか見られた。「授業の流れ・活動の順序」を体験的に学ぶことができれば、模擬授業の効果は一層高まることは確かである。しかしながら、学生の数と時間の制約を考えると、実行可能性がどれくらいあるのかは不明である。現在の条件下で効果を高められる練習のあり方を引き続き考えていきたい

と思う。さらに、数人から同様に挙げられたものとして、「デジタル教科書の使い方」（中学校）があった。これについては、システムが高価であるためか、自治体、学校ごとに導入の状況が異なり、導入されているもどの程度使用しているかは、ケースバイケースである。今後、普及が進めば、必須の指導内容として扱う必要が出てくるかもしれない。最後に、多くの学生が「もっと学んでおきたかったこと」として挙げた「指導案の書き方」についてであるが、これについては、都道府県ごと、自治体ごと、学校ごとにフォーマットが統一されていないことが多く、現場の先生方のとらえ方もまちまちである。指導法の授業等でも一定の指導をしているものの、教育実習で現場に入った学生の中には、その書き方（項目立て、情報の量や深さなど）について、学んだことと異なる助言を受けたりしたことで、戸惑ってしまった者が少なからずいたのかもしれない。

4. まとめ

本稿では、2022年度4年生を事例として取り上げ、本学科における教員養成の現状と課題について検討を行った。教育実習に関するアンケート調査の結果、概して学生の満足度は高く、大学の授業で学修した内容を活かす形で授業実践を行うことができたことが示された。また、教育実習を通して学生は、それぞれの課題を明確化すると同時に、より多角的に英語教育を捉える視点を養うことができたことが示唆された。学科が提供する「教育実習（事前指導）」及び「英語科指導法Ⅰ～Ⅲ」についても、文法導入や本文導入、言語活動のデザインといった、実習を行う上で必要となる主要な項目を網羅し、豊富な模擬授業の機会を提供することによって学生に資する内容であったと考えられる。

今後の課題としては、(1) 50分を通した模擬授業の実施の可能性の模索、(2) デジタル教科書を含むICTの活用への習熟、(3) ALTとのチームティーチングを学修内容に組み込むことの検討、(4) 板書の仕方や指導案の書き方に関する指導の充実化、(5) 英語の授業を実践する上で求められる英語運用能力の底上げ、(5) 学生が疑問や違和感を覚えた事例を蓄積し、ケーススタディとして授業で取り上げること等が挙げられる。本研究で得られた知見を大学での指導に活かすとともに、次年度以降も引き続きデータの収集・分析を行い、本学科における教員養成のさらなる充実化を図っていきたい。

【注】

- 1) 英語教育学科では中学校教諭一種免許状（英語）及び高等学校教諭一種免許状（英語）を取得することができる。
- 2) 本研究で実施したアンケートは、教育実習における英語の授業についてのみを射程としている。
- 3) 英語教育学科では、教育学部及び鎌倉女子大学の学生が中学校教諭二種免許状（英語）取得するために「教育実習（事前指導：副）」及び「英語科指導法Ⅰ」を開講しているが、本稿では割愛する。
- 4) 玉川大学ではセメスター制を採っており、1年次春学期を「第1セメスター」、同秋学期を「第2セメスター」のように呼ぶ。
- 5) カリキュラムの見直しに伴い、「英語科指導法Ⅰ」が留学後の第6セメスターから留学前の第3セメスターの開講となり、「英語科指導法Ⅲ」が必修となった。

【参考文献】

- 清水裕士（2016）「フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』1、59-73.
- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』東京：開隆堂.
- 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』東京：開隆堂.

Shimizu, H. (2016). An introduction to the statistical free software HAD: Suggestions to improve teaching, learning and practice data analysis. *Journal of Media, Information and Communication*, 1, 59–73.